
私たちに しときなさい！

イケダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私たちに しときなさい！

【Nコード】

N7976X

【作者名】

イケダ

【あらすじ】

仏頂面で女つ気無しの男がなぜか二人の美少女から想いを寄せられることになる微ハーレムな物語

登場人物一覧

銀杏高校の生徒

原田 柊兵 はらだ しゅうへい

主人公。私立銀杏高校の二年生。眼光鋭く、不機嫌時には喧嘩
っ早くなる性質。

風間 美月 かざま みつき

柊兵や英範、怜亜の幼馴染。とても活発、運動神経もいい。柊
兵のことが好き。

森口 怜亜 もりぐち れあ

柊兵や英範、美月の幼馴染。少々控えめな性格で料理が得意。
柊兵のことが好き。

楠瀬 慎吉 くすのせ しんきち

柊兵のクラスメイト。スマートな優男。女性の守備範囲は五人
中、一番狭い。

真田 尚人 さなだ なおと

柊兵のクラスメイト。要領が良く、世渡りが上手い。年上&眼
鏡女性が好き。

佐久間 英範 さくま ひでのり

柊兵のクラスメイトで幼馴染でもある。家は空手道場を経営。
グループ中、一番の常識人。

難波 将矢なんば しゅうや

柘兵のクラスメイト。単純な性格のお調子者。実家は蕎麦屋。女性の守備範囲が一番広い。

その他

ミミ・影浦かげうら

西洋占星術師。朝の情報番組で放映される占いコーナー、【ミミ・影浦の愛の十二宮】の占い師でもある。柘兵の苦手人物の一人。

この作品は自サイトより転載中です

斜に構えた仏頂面。

眉間にくつきりと刻まれた二本の深い立て皺。

……はつきり言おう。今日も俺は機嫌が悪い。

仲間内から最近益々キツくなってきたぞ、とはやし立てられている目つきは確かに一段と鋭さが増しているような気がする。それは不承不承ながら認める。

俺の不機嫌の原因はただ一つ。

それはここ数日欠かさず見るようになってしまった朝の情報番組、『モーニング・スクランブル』中に放映される、『ミニ・影浦の愛の十二宮図』。こいつが俺の心の平静をいつも乱しやがる元凶だ。

……とはいっても星占いに興味があるわけではない。むしろ占いの類は昔から蛇蝎の如く嫌っている。

“ 自称 ” も含めればそれこそ途方も無い数が存在すると思われる未来の預言者たち。

奴さん達は明日やほんの一週間先の近未来から、迷う魂が天に還るまでに辿るであろう遠い未来までを、さも親身になっているような物言いで悩める子羊達に占いという形で予言する。

しかし俺はその予言を信じない。

「惑う子羊達の足取りがもう乱れないように」という大義名分の下、占星術師たちはカードや水晶、天眼鏡等の、それぞれが得意とする様々な手段を使用し、未来を見透かす千里眼を駆使してよりよく確実な人生を送る為の助言とやらを一段上の場所からご大層に指南しときやがる。

俺から見りゃあそんなことは余計な世話だと頭のとっぺんから怒鳴りつけてやりたい傍迷惑な助言の数々も、悩める者にとっては遙か先まで煌々と照らし出す、“希望” という名の灯のついた魔法の特大カンテラに見えるらしい。まったくもってアホらしい。

占い師達が言葉巧みに紡ぎ出す予言の数々は確かにもっともらしい響きに聞こえる。

が、考えようによっては何通りかに解釈することの出来てしまうあんなあやふやな言い草を、どうして世間の奴らは簡単に信じ、そしてまたそれを己の未来の糧にしようとする事が出来るのか、まったくもって不思議でならない。

だがいくらそう苦々しく思っけていても、こちらにはそれに科学的に反論するだけの確たる物証が無いのが業腹だ。冗談抜きでタイムマシンでもどっかの科学者が実用化してくればそれで自分の未来を見に行き、「おい違うじゃねえか！」と胸倉掴んで怒鳴りつけてやることもできるんだがな。

しかし敵も去るもので(いつの間にか敵扱いだが)、
『限られたデータのみの科学的根拠だけに思考を縛られ、この殺伐とした時代を孤独に生きていくのでしょうか？ 一を三で割ることは永久に出来ませんが、一つのお煎餅を人の手で三つに分けることはできるのですよ』

とすかさず反撃してくる。よく分からねえが何か頷けるものがその中には確かに存在して、思わず納得してしまいそうになる。

ま、量りで正確に計測すれば手で割ったその煎餅も完全な三等分ではないだろう。

でも確かに三つに分けることは出来、三人の人間に煎餅を与えてやることは出来るもんな。

……ってなんだよ、もしかして俺も結構暗示にかかりやすい型なタイプ

のか？

人は悩みを抱えると何かすがるものが欲しくなる。それはよく分かる。

そしてそれがヘビーな悩みなら悩みであるほど、尚更占いという物に傾倒し、そこに束の間の安寧を求めて疲弊した心を委ねたくなる気持ちも分かるような気がする。

だがそれがあまりにも不確かな予言そんなもんで本当にいいのかよ、と天邪鬼な俺は思うわけだ。

と、俺がいくらこんなひねくれた考えを持っていても、実際の所「占い」というジャンルはこの荒んだ世の中に、どんな強風でも決して揺らぐ事などのない大木の根つこのようにしつかりと定着、繁栄していやがるし、もちろん需要もある。

年末になれば書店には『来年のなんちゃら星人の未来・丸分かり！』なんていう本がうず高く平積みになれ、それなりにバカスカと売れていくのを目の当たりにする光景はもうお馴染みだ。結局はあちらさんの大勝なんだよな。

だがそんな予言者達の中で、時折図々しくテレビに登場してくる功名心に取り憑かれた占い師達の一部は、オリンピックで日本が取れる金メダルの数など、逃げ道の無い予言をズバリと言い切ることもある。

しかしこの場合も、もし外れたとしてもなんら問題は無い。予言が外れても奴さん達はそれが間違いだっただけで決して認めないからだ。

てめえの予言が外れたのに臆面も無く、「占いは水物なんですから」と堂々とテレビで言い放った占い師を見た時は当時心底呆れたものだ。

……少々、暴言が過ぎただろうか。さて、ここからが本題だ。
これだけ占いの類を馬鹿にしまくっているこの俺が、何故『ミニ・
影浦の愛の十二宮図』を毎朝欠かさずチェックし、しかもその結果
に密かに一喜一憂しているのか？
理由は至極単純明快。

それが異様に当たっちゃまっているせいだ……。

「はらだしゆうへい事實は小説より奇なり」とはよく言ったもんだと苦々しく思う。
原田柊兵、ここで華麗に敗北宣言だ……。

つい最近まで、俺にとって朝の情報番組はただの雑音に過ぎなかった。

毎朝の忙しい一時の中で時刻確認を兼ね、家族の誰かがかならずつける居間のテレビ。そいつが延々と垂れ流し続ける情報を右から左に流す。

「モーニング・スクランブル」には専属マスコットのなスタンスの奴がいやがって、珍妙な形の目覚まし時計 “ モニン君 ” とやらが五分置きに教えてくれる現在の時刻、それだけは無意識にその雑音の中から器用に聞き分けて拾い出す。

朝から生真面目なニュースに耳を傾ける気もねえし、広げたスポーツ新聞を横目に飯を食うからスポーツニュースも必要ない。ましてや芸能人で誰と誰が付き合っているだとかなどのゴシップネタには毛ほどの興味も無い。

「今月オススメのヒット漫画はこれです！」

などと自分に興味のある話題が偶然耳に飛び込んできた時だけ、箸を片手に身体を大きく後ろに捻る、そんな毎朝だった。

だから 『ホロスコープ 愛の十二宮図』なんていう、いかにも女子供のみが喜びそうな下らない星占いなんざ、まさに雑音中の雑音、一言たりと聞きたくない、……はずだったのに、今の俺は毎朝この五分間のコーナーを軽い動揺を抱えながらヘビイチェックしている。

九月十四日、月曜日。午前七時四十八分。

『ミミ・影浦の愛の十二宮図』が始まった。いよいよだ。

大きく後ろを振り返り、箸を止め、固唾を吞んで本日の自分の運勢を見る。

俺は十月十九日生まれなので該当星座は天秤座になるらしい。牡羊座から始まって七つ目、本日の天秤座の恋愛運命の発表がきた。

「さあつ、占うよ〜ん！」

と叫びながら毎回画面中央に飛び出てくる、この全然可愛くねえ間延びしたおたふく顔の着ぐるみ天使だけは本気で勘弁してくれ。こいつを見る度に精神不快指数が軽く五倍に跳ね上がる。

この占いはその日の内容によって発表前にBGMが変わる。いい占い内容の時はポップ調、悪い内容の時はベートーベンの運命の曲が流れる。

……来た。

「さあつ、次は天秤座だよ〜ん！」

のアニメ声と共に聞こえてきたのは軽快なポップ調のメロディだった。

「にゅふふ〜 とつてもいいことがあるかもよ〜ん！」

異性があなたに急接近！ 仲間の協力ですさらに新しい展開が！？ 流れに身を委ねれば、今日は一日超ハッピーデイ！ やったね

「

……何が「にゅふふ」だ、何が「やったね」だ。

やたらと感嘆符が出まくりだった今朝の天秤座の占いを見た俺の機嫌はここで一気に悪くなる。

不細工なおたふく天使が先端に星のついた長ステッキを振り回し、「やったね やったね」とドストドス足音を立てながらスタジオ内を所狭しと走り回っている。今すぐ飛び掛って本気でこいつの首を絞めたい。

しかめっ面で茶碗の残りをかきこむと乱暴に席を立つ。

今の予言は「超ハッピー！」どころか、俺にとっては「今日も大変なことが起きます」と公共の電波で宣言されたようなものだ。

浮かない顔で洗面所に行き、もう一度顔を冷水でザツと洗ってと

りあえず気持ちを切り替えると、スポーツバッグを肩にかけ家を出た。しかし母親が「柎兵、お弁当忘れてるわよ！」と玄関で叫んでいるので慌てて一度家に戻る。

何やってんだ、俺。相当動揺している。

まさかあんたがお弁当を忘れて行くこととするなんてねえ、と驚く声を無視し、再び外へと出た。

駅に向かって歩きながら、たった今宣告されたあの予言が今日こそ外れる、と強く強く祈る。

……実は最近の俺は恋愛絡みで憂鬱なことがある。

だからこそ、本来の自分なら真っ先に情報遮断にいきそうだなあんな恋愛占いに耳を傾けるようになったのだ。

そして飯を食いながらなんとはなしに耳に入ってくる天秤座の恋愛占い内容に、

(……おい、もしかしてこの占い、ある意味当たってるんじゃないかねえか?)

と俺が気付き出してまだ八日目だが、現在までこの占いの的中率はほぼ百分だ。

怖い。怖すぎる。

なぜなら運命のBGMが流れ、あのおたふく野郎が

「今日は異性とあまり進展がないかも……しくしく、ぐっすん」

と予言した時は俺を悩ますあの二名の元凶共は確かに側に来なかったし、

また、今朝のように、

「ウフッ、いいことがあるかもよ〜ん」

とあのおたふくが激しく妙な踊りをかました時は筆舌に尽くしが

たい凄まじい攻撃を喰らっている。しかも今朝の予言は恐ろしいことに、仲間の協力ですらに新しい展開が!? などとまでのたまにだしていた。

仲間……? ?

まさかあいつら、俺を売る気じゃねえだろうな! ?

一抹の不安が胸をよぎる。

とにかく最近のあいつらは少し態度がおかしい。

……いや待て。むやみやたらに仲間を疑うのは良くねえな。

とにかくあの二名の元凶のせいで最近の俺はこんな風に疑心暗鬼の塊と化してしまっている状態だ。

つい最近まで現在の生活に特に不満は無かった。

勉強は面倒だが、学校はまあ面白いし、それに学内でつるんでいる悪友もいる。家にも特に問題があるわけでもなく、父親、母親、小学五年の弟一人、という一家四人のありきたりの家族構成だ。

しかし極たまにだが、ふとそんな毎日の日々が退屈で空虚なものに感じ、自問自答することがある。いや、あった、というべきか。

俺は毎日こうして無味乾燥な日々をただ繰り返して続けているのか? と。

しかしそれで良かったのだ。

病に倒れてから初めて健康の有り難味を強く実感するように、波乱万丈な現在の日々の中に放り込まれて以来、今は安泰で平穩だったあの頃の日々が恋しく、ただただ懐かしい。凪いでいる海の良さが分からなかったのだ。後悔しても後の祭り。

それに引き換え、今の状態は例えるなら大しけで荒れ狂う海の中にポツンと取り残され、たちまち渦の中に巻き込まれようとしている一枚の枯葉。(すでにボロボロ)

あるいは大波に翻弄され、今にも深い海底に沈みそうな難破ボ―

ト船。救助信号《S・O・S》に応えてくれる奴もいない。それどころか逆にオールを取り上げられている始末。漕げねえじゃんかよ。そんな孤立無援の哀れな一艘の難破ボート。それが現在の俺だ。

九月半ばの旋風が電柱脇に溜まった気の早い枯葉を巻き上げる。

スポーツバッグを右肩にかけ、スラックスのポケットに両手を突っ込んで背を丸めてひたすらに歩く。長身のせいで前かがみで歩く癖がなかなか治らねえ。

遠くに銀杏高校が見えてきた。

……今の俺の願いはただ一つ。

あの恐怖の占いが今日こそ、今日こそ外れること。

「せえーのっ!!」

下を見て歩いていたら、不覚にも反応が一瞬遅れちゃった。両手をポケットに突っ込んでいたのも敗因だ。

後ろから聞こえたその声にギクリとしながら振り返ろう……としたが間に合わなかった。

一気に背中に感じたのはズシリと少々重い感触。だが妙に柔らかい感触が背中に当たる。

「おっはよ　っ！　柊兵！」

「美月ッ!?!」

背中にしがみついているある一人の女を見た俺は後ろに向かってそう叫ぶ。

白い歯を見せニッコリと笑い、俺の背中に子泣き爺いのように取り憑いたのは風間美月。かざまみつき

スポーツ好きなせいで少し日に焼けた肌と、背中を中心までの長く麗しい黒髪、そして抜群のキュートな笑顔が最大の魅力（本人談）の、天真爛漫といえは聞こえがいいが、有り体に言っちゃまうとにかくうるせえ女だ。

「なっ、何してんだよ、お前は!!」

と叫びながら後ろを向いたせいで前方の防衛面がついおろそかになった。重ね重ね不覚。

今度はすかさず俺の胸に目掛けてトンッとか何かがつつかってきた。感じる軽い激突感。こちらの感触も同じように柔らかい。

「おはよ、柊ちゃんっ」

「れ、怜亜ッ……!?!」

今度は真下に向かって叫ぶ。

勝手に胸の中に飛び込み、はにかみながら俺を見上げている女は
森口怜亜。もりぐちれあ

透き通るような白い肌に黒目がちの大きな瞳、そして薄茶のショートボブが一際可憐で愛くるしい(美月談)、華奢な女。美月に比べると少々控えめな性格だ。

後ろに一人、前にも一人。

二人の美少女(繰り返すが美月談)に抱きつかれ、場所ではうなら三色サンドイツチのど真ん中、頼りない薄っぺらな合成添加物たつぷりのロースハムの位置に置かれた俺は、通りの向こうにまで突き抜けるような大声で咆哮する。

「お前らあつ！俺から離れろおお ツ!!」

「へ？なんで？」

俺の腹の底からの絶叫に背中の中的美月はケロツとしているが、怜亜はほんの少しだけ驚いたようだ。小さな口に手を当ててキョトンと俺の顔を見ている。なあ、頼むから俺の真下でそんな顔すんな。

「お、お前らな、いい加減にしるよ！この間転校してきたかと思つたら俺にベタバタしゃがって！」

「いいじゃん、あたし達、白樺しろがは小時代のかつての同級生なんだからさ。チクワの友ってやつよ」

「竹馬でしょ、美月」

美月の言い間違いを優しく怜亜が訂正するがそれも激しくどうでもいいことだ。

くそっ、それよりもこの、この前後の柔らかい感触……ッ！ 脳内水銀温度計が急激に上昇中。沸点百度は軽く超えていそうだ。……駄目だ！！ 何も考えられなくなってきた！！ おかげでただでさえ口が悪いのに余計に拍車がかかる。「うるせえっ！ チクワでも竹馬でもどっちでもいい！ たっ……、いつ、いいから俺の側に来んじゃねえ！」

危ねえ、うっかり「頼むから側に来るな」と言いそうになつちまった。こっちが下手に出てどうすんだ。

「こんな朝っぱらからそれだけ大声出せるってことはちゃんと朝御飯食べてきてるね、柊兵！」

俺の背中から飛び降りた美月は前に回り、怜亜と共に俺の正面に立つ。

「そついえば新聞の記事で読んだんだけど、十代の男の子って朝御飯食べて来ない人がとっても多いんですって。朝はちゃんと食べないと脳が活性化しないのに……。えらいわ、柊ちゃん」

「怜亜！ お前は俺の事を柊ちゃんって言つのも止める！」

「だって柊ちゃん……」

「呼ぶなっつってんだろ！」

「ちよつと柊兵！ 怜亜をイジめたらあたしが許さないからね！」

ひゅっ、と空を切る音がして美月の正拳が俺の鼻先三寸の所で止まる。

「美月、お前まだやってたのか？」

殴りつける真似をされて反射的に脳内温度が下がり、逆に冷静さを取り戻せた。

「うづん、ここを引越して以来、道場にはもう通ってない。自己鍛錬のみ……」

こいつはかつて俺と同じ道場で空手を習っていたことがある。

「その割にはいい動きしてるな」

「えーっ！ そう？ ありがとうっ！」

俺に対して激怒しかけていたはずなのに、ちよいと褒めてやった
らもうニコニコと笑っている。

しっかし昔から変わんねえよな、その単純な所……。

「柊ちゃん、一緒に学校に行きましょう」

ほれ見ろ、こっちも全然堪えてねえし！

また怜亜が俺の名前をちゃん付けで呼びやがったが、もう俺は叱
りつける気力を完全に削がれていた。返答する間も与えられず、即
座に両腕にこいつらの腕が絡みつき、ずっしりとGがかかる。

「ではでは、れっつごー！」

能天気な美月の声が気分をさらに落ち込ませる。

覆面パト内に連行される犯人の心境はこっという心境なのだろうか
……。

クラスを見渡せば何人かは必ずいるはずだ。

“ 男の中にいればまったく平気なのに、女の前だと途端にグダ
グダになる奴 ” 、俺はまさにこのタイプだ。

……… って自分で言ってる情けねえな。

仲間の一人によく言われているのだが、それでも “ 女 ”

が 【 嫌い 】 のカテゴリーに入っていない所がミソなんだそ
うだ。ほっとけ。

でもその指摘は確かに当たっているのかもしれない。女は嫌いで
は無く、あくまで苦手な存在だ。周囲の奴らには硬派と思われてい
るらしいが、別に硬派を気取っているわけではない。緊張のあまり、

単純に女と何を話していいのか分からなくなるだけだ。

だから仲間とつるんでいる時は、極たまにだが冗談も言い、時には突っ込まれ、口下手なりに口数も増えるのだが、自分から女に話しかけることは一切無い。

逆に女から話しかけられると、直径十センチ級の特大正露丸を思いつ切り噛み潰したようなしかめっ面になっちまう。

女の他に苦手なのはネコだ。この小動物が苦手なものも、どこことなくネコは女っぽいところがあるせいだと思う。ミヤア、と可愛らしく鳴かれ、澄んだ目でこつちを見上げてその何ともいえないすべすべした毛並みを身体になすりつけられでもしたら、背中にゾゾオーツと悪寒が走る。

ネコを愛でる気持ち自体はたぶん俺の根底に脈々と流れているとは思っているのだが、その上に、『悪寒』『動悸』『息切れ』『眩暈』『冷や汗』、以上の断層が何層にも渡って次々に厚く覆いかぶさっているのです、どうしても及び腰になってしまう。ネコでこれだから女が側にくるとこの症状は更に増し、身体が硬直する。気つけ及び平静を保つ為に、救心一ビンの中身を全部口に放り込みたいくらいだ。

……おい、それよりも美月に怜垂。

お前らが俺を両脇から連行するのはまだ我慢する。耐えてみせる。だが、だがな！ そんなにぐいぐいと身体を押し付けられないでくれ！ 腕にな、お前らの片胸が時々当たってきやがるんだっての！

しかしそんな俺の内心の叫びを知ってか知らずか、美月の奴が、「うゝ今日は寒いよねー！ ねー怜垂、ちゃんとあったかくしてる？ 寒かったらさ、柎兵にもっとくっつけばいいよ！」

「うんっ！」

「じゃっせっかくだからあたしもっ！」

おいおいおいっ！ お前ら待ってっ！

だが容赦の無いWサンドイツチ攻撃再び。

頬を染めてそつと俺に擦り寄り、腕をさらに絡ませてくる怜亜。
二の腕が鬱血するんじゃないかねえかというぐらいの力でしがみついてくる美月。

両腕にでっけえマシユマロをムギユツと強引に押しつけられたよ
うな柔らかい感触がまたしても俺を襲う。

……くそつ、一旦は静まった動悸がまた激しくなってきたやがった
じゃねえか！

このままだと次々に襲い掛かる激しい動悸に耐えかねて、その内
冗談抜きでぶつ倒れそうな気がする。そんな醜態を晒したら末代ま
での恥だ。マジで救心が欲しい。今なら一ビン飲み干してみせる。

ああ畜生、そんなことよりもやっぱり今日もあのおたふく占いが
当たりやがったか……。ミニ・影浦、恐るべし。

……なあミニさんよ、俺にとってはまったく逆の意味だが、あんな
恋愛占いとやらがよく当たるのは分かった。大したもんだ。褒
めてやる。

だからその占いで教えてくれ。

俺がこの生き地獄から抜け出すには一体どうしたらいいんだ！？

ツインカム・エンジェル！ <1>

朝のHRが終わった。

椅子にどっかりと座り、机に頬杖をついて険しい顔で窓の外に顔を向けていた俺に背後から声がかかる。

「柊兵くん、今日も君は朝からハッピーなことがあったようだね？ いやあ羨ましいなあ〜っ！」

……来やがったな。

悪友メンバー四人の内の一人が早くも登場だ。

くすのせしんいち
楠瀬慎志。通称、シン。

こいつはグループのムードメーカー的存在で、とにかく場を盛り上げるのが上手い男だ。

涼やかな二枚目顔に合わせたロングレイヤーのヘアスタイルが自慢で、後ろから見ると女と間違われそうだが背丈があるので今のところ間違われたことは無いらしい。

俺を一番からかうのがこいつだ。とにかくいじるのが面白いと言う。相手にすると益々いじられまくるのでシンのからかいには無視を決め込むことが多い。

だがそれでも時折堪えきれずに怒りの臨界線ポーターラインを突破しそうになる時があるが、シンはその見極めに非常に長けている男だ。俺の発する靈気を直接肌で感じる事が出来るのか、俺がブチ切れそうになる直前であらかうのをピタリと止める。

しかしシンは何度ヒヤリとする場面になっても俺をからかうその危険な遊びを一向に止めようとする気配は無い。こいつはもしかしたら目前にせまる恐怖スリルを楽しむのが好きな、真性のマゾ体質なのかもしれないと最近の俺は時々思う。

「なにになに？ 聞くところによると今朝はあの可愛い美女二人を両手にぶら下げて登校したんだって？ いやあ、今、この学校で柎兵くん以上の幸福男ラッキーマンはいないだろうなあ！ 俺が断言するよ！」

俺は窓の外に顔を向けたままでシンを無視する。こいつの相手になれば余計に泥沼になっちまうからな。しかし毎朝遅刻ギリギリで来るシンがこんなことを言い出すのは他の仲間の誰かが教えたからに違いない。余計なことをしやがって。

「どうでしたか、美少女二人に挟まれたご気分のほどは？」

無視しているにも関わらず、シンはまだこの話題を続けている。悔しいことにあのおたふく占いもまた的中しちゃったし、今朝は久しぶりにキレそうな予感がしてきた。そこで最終警告代わりに横目でギロリとシンを一睨みする。今まで何度も見慣れてきているはずなのに、シンは俺の顔を見て一瞬たじろいだ。やはり今朝は相当ヤバイ目つきになってるらしい。

「でっでさ、柎兵くんはこれからずっとあの娘達と一緒に登校するわけ？」

ビビッているくせに最初の出だしをつつかえながらもシンはまだ俺に絡みやがる。

「知らねえっ！ 俺に聞くよりあいつらに聞け！ ついでにもうまとわりつくなくて言っとけ！」

と苛立ちを一気にシンにぶつけたが、シンは途端に「はあ？」と素っ頓狂な声を上げた。

「なんでだよ？ 勿体無いことすんなよ！ あんなに可愛い女の子二人から好かれてさ、お前はマジで幸せモンだぜ！ ドゥーユーアスターランド？ 柎兵くん、君は分かってるか？ 今置かれているご自分の素敵な立場ってものをさ」

「じゃあお前が代わってくれ」

「ちよい待てよ柎兵！　もしかしてわざと言ってるのかよ！？　お前って意外と性格悪いんだな〜！」

シンはそう叫ぶと大袈裟に肩を竦め、両掌を上に向けて腕を二、三度上下させた。オーバーアクションが好きな奴だ。

「いいかい柎兵くん、代われるもんなら今すぐ代わりたいつつーの！　ソッコーで、チョー電光石火で代わってほしいよ！　でもよ、美月ちゃんも怜亜ちゃんも、お前しか見てないじゃんか！　あーあ本当にいいやな〜、あんな可愛い幼馴染二人から想われるなんてさ〜！　俺も真実の愛を探しに旅立とうかなあ……」

そこへすかさず割り込む低い声。

「いや、幼馴染というのは少々違うな、シン」

佐久間英範さくまひでおのり。通称、ヒデ。

あくまで俺らグループの中での話だが、一番の常識人だ。

百八十四センチのがっしりとした身体とその濃い顔つきのおかげ、二十代半ばに見られることも多々ある。高校生とは思えないその落ち着いた着きはシンに言わせるとすでに「老成」の域に到達。父親が空手の師範で道場を経営しているので、幼い頃から拳法を嗜んでいるせいもあるかもしれない。俺も小学二年の時からその道場に通っているんで、高校に入ってからつるむようになった今のメンバーの中でヒデだけは小学生時代からの腐れ縁だ。

俺とシンのすぐ横で腕組みをしながら話を聞いていたそのヒデが会話に割り込んできた。余計なこと言い出すんじゃないぞ、ヒデ。

「へ？　幼馴染じゃないの？」

「シン、前にも話したと思うが、美月と怜亜、柎兵、そして俺が白樺小で同じクラスになったのが小学四年の時だ。その時からの付き合いだから幼馴染っていうのとは少し違う」

「だって小学四年なら九〜十歳あたりだろ？ その辺りなら充分幼馴染の定義内じゃん」

「そうか？ 俺は幼稚園ぐらいからの付き合いが当てはまるものだと思うっていたが、柊兵はどう思う？」

「知らねえっ！ どうでもいいっ！」

「ははっ、今朝は一段と機嫌が悪いね、柊兵」

とそこにまた俺らの輪に加わってくる爽やかな男が一人。

「僕、今朝ここから柊兵が登校するのを見てただけだよ、もう少し歩くスピード落としてあげなよ。あの娘達、ずんずん歩く柊兵の腕から降り落とされないように必死にしがみついていたよ？」

こいつが情報源か……。真田尚人。さなだ なおと

俺らの中で一番世渡りが上手い。

中性的なその笑顔と自分のことを「僕」と言う優しい口調は年上女の母性本能をくすぐる大きな武器だ。そのせいかこいつの知り合いの女は見事に年上ばかりだ。女の遍歴は非常に偏っていると言わざるを得ない。

俺らのグループは学業、素行の面で教師からの呼び出し率が高いことでも有名だが、その中で尚人だけは例外だ。頭の良いこいつは教師の覚えもめでたく、職員室への入室率は断トツで低いのも特徴だ。ちなみにシンと出身中学が同じで昔から二人でよくつるんでナンプに繰り出していたらしい。

「ほら睨まない、睨まない。柊兵もさ、そんな世間を警戒しまくるハリネズミみたいな顔してないで、もっと自然な顔してなよ。悪くない顔してんのにさ、絶対損してるよ」

「う、うるせえ」

尚人はメンバーの中で一番人当たりがいいのでこいつと話す時が一番調子が狂う。

“ 氣立ての優しい綺麗な女を男に転向コンバートさせたら尚人になった ”、というのがこの男に対して一番しつくり来る説明のような気がする。だからこいつから微笑みを浮かべて話しかけると、それが俺にとつてどんなに怒髪天を衝くような内容でも怒りが天を震えさせることはない。つたくいんだか悪いんだか。

尚人から顔を背けた途端、男にしては少々甲高い声が場に挟まる。

「なあなあ柎兵、でさ、お前はどつちが本命なわけ？ さつさと決めるよなあ！！」

難波将矢。ななばしやうや

グループの中で一番のお調子者。

そしてメンバーで唯一兄弟姉妹がないせいか、どこか呑気で坊ちゃんの所がある。

良くも悪くも我が道ゴイング・マイウェイを行く男だ。

実は尚人の次に童顔の男のだが、それを嫌っている将矢はこの银杏の校風が比較的自由なのをいい事に、髪を脱色ブリーチしまくっている。俺ら五人の中で一番背が低いこともかなり気にしているようだ。男は見てくれじゃないと思うんだがな……。

その将矢がまたしてもやかましく叫ぶ。

「なあマジで早く決めてくれって柎兵！ で、残った方をこの俺がパツクリといただくっ！！」

俺の交感神経のあちこちに埋められている激怒地雷源を踏みつけたのはこの日もこいつだった。

将矢はとにかく場の空気が読めない男なので、こいつが俺をネタに口を出すとそれは大抵俺の大いなる怒りを呼び起こすことになる。そう考えると、俺が憤怒の形相になる前にシンが紙一重の所で毎回

それを上手く回避するのは、やはりシンの才能なのだろう。ま、羨ましくも有難くもなんともないがな。

それよりも将矢だ。

俺の視線は完全に将矢を照準ロック固定する。攻撃開始。

「ぐああああああ ツッ!」

無言で椅子から立ち上がり、将矢の首にスリーパーホールド。思わず出たこの技、昨夜読んだ昔のプロレス漫画の影響か。

しかし面白いくらいに綺麗に決まったな。気を良くし、さらにきつく締めつける。と同時に苛々していた気持ちが少しずつ霧散していく。将矢に感謝だ。

頸動脈を締められ、青い顔で空中をかきむしっている将矢を憐憫たつぷりの視線でシンが眺める。

「ああ、将矢はストレートに言い過ぎ。ほんと下手だなあ、柎兵をいじるのが」

「まあ今日はもうその辺にしとけ柎兵」

金のヘッドを抱えていた腕をヒデに軽く掴まれた。

「見る、将矢はすでに宇宙そらに逝きかけてるぞ」

ここで将矢に死なれても寝覚めが悪い。渾身のスリーパーホールドでだいぶ怒りを放出できた俺はあっさりと獲物を放擲することにした。

教室の床にボタンとつつ伏せに倒れ、ヒクヒクと床で蠢めく無様な将矢の側に心配そうな顔で尚人がスツと膝をつく。優しいもんな、尚人は。

「……なんかこの動き、理科の実験でカエルを解剖して電流を流した時の動きによく似てるね」

おいおい尚人、見かねて心配したんじゃないのかよ？ まあやつ

たのは俺だが……。

「いいかお前ら、こんなふうになりたくなければもう黙れ」

将矢を除いた全員に改めて最終通告すると、残りのメンバーは神妙な顔で全員一度だけ首を縦に振った。

なかなか素直じゃんか。今日の俺は余程危ないオーラを発しているらしい。こいつらの従順さにとりあえず納得した俺はドサリと椅子に腰を下ろし、再び仏頂面で外を眺める。

……後で知ったことなのだが、もしこの時、後ろの教室内を振り返っていたら俺の運命もまた少し変わっていたのかもしれない。

あの恐怖のミミ・影浦の占いも半分は外れ、俺の溜飲も多少は下がったかもしれない。

でもこの時の俺は知らなかった。

俺の背後でシン達が神妙な顔をとつくに止め、お互い目配せをしながら肩を震わせ、声を殺して笑っていたことを。

・
・
・
・
・
・
・
・

昼休み。昼食の時間だ。

俺達は天気が晴れの場合は必ず外で昼飯を食うことにしている。

がやがやとやかましい教室より、気持ちのいい青空と風の下で食うほうが百倍美味しく感じるからだ。

場所は校舎裏のケヤキの大きな下。

以前、この場所は争奪戦が激しい場所だったようなのだが、俺らがここで弁当を食い出すようになって自然と他の奴らはこの付近に足を向けなくなった。

……まあ、その理由はなんとなく分かる。

図体のでかい男共がわらわらと五人も群れて、しかもその中に目つきの悪い俺や、更に大柄のヒデ、金髪頭の将矢などがいれば、普通の奴なら触らぬ神になんとやらで、因縁でもふっかけられないように自己防衛に走るのも頷ける。

ま、こつちにしてみりゃあ、こんない場所を俺らだけで独り占めできるので願ったり叶ったりだ。

九月半ばに入り、何気なく見上げた空がまた一段と高くなっていることに気付く。

ケヤキの葉も少しずつ枯葉に変わり、風も段々と薄ら寒くなってきた。あともう一ヶ月もしない内にここで昼飯を食うのもしばらくはお預けだろう。

「いや」しかし今日はいい秋晴れだねえ。飯も食ったし、午後の授業に備えてシエスタでもしませんか、皆の衆？」

一番初めに飯を食い終わったシンが芝生の上に大きく足を投げ出して昼寝の提案をした。

「いいな」

「僕も依存無し」

「寝ようぜ、寝ようぜ！」

ヒデ、尚人、将矢がすかさず同意し、弁当箱を片付けると俺以外の全員が芝生の上にさっさと身体を横たえる。

「あれ？ 柊兵は寝ないのか？」

胡坐をかいたまま動かない俺をシンが促した。

「いや、別に寝てもいいけどよ……」

「じゃあほらほら横になって横になって！ 食後のくつろぎは重要ですよ柊兵くん！」

シンに急かされ、両腕を頭の後ろで組み、それを枕代わりにして俺もとりあえず仰向けになった。

なんとなくだが今のこの展開がなぜかとってつけたような展開に感じたのは気のせいか？

だがこうやって食後に寝るのは誰かが言い出してたまに起こる展開なので俺もそれ以上は深く考えずに、上空に斑点状に広がる翳雲を視界から遮断することにする。

すぐに周りは静かになった。

昨夜、深夜二時過ぎまで部屋で格闘漫画の二度読みなんて馬鹿な事をしていたせいであっという間に睡魔に襲われ始める。たぶん五人の中で一番最初に意識を失ったのは俺だ。

……というか、意識を失ったのは実は俺だけだった。

ツインカム・エンジェル！ <2>

夢を見た。

ネコに襲われる夢だ。

元々夢見が悪い方なのか、俺は昔から毎夜見ている夢を滅多に覚えていない代わりに、記憶に留まる夢はほとんど悪夢という悲惨な体質だ。

今回俺のレム睡眠がご丁寧に見せてくれやがった悪夢は、ナイトメアよりもよって真つ白いネコが俺にその身体を摺り寄せてくる夢だった。

逃げ出したくてもなぜか俺の身体はまさにこれから人体実験される生贄モルモットのように、手術台に革のベルトで手足をしっかりと固定され、身動きが一切出来ない状態になっている。

白ネコはニャーニャーと甘ったるい声で鳴きながら、まず俺の腹の上にヒラリと飛び乗った。

「あ、あっちに行けつて！！」

首にも革ベルトを巻かれているがそれがぎりぎり喉仏に食い込むのも構わずに、必死に四十五度まで頭をもたげて怒鳴りつける。

しかし白ネコはまだ子猫のせいかな全然ビビる様子を見せず、相変わらずみーみーと鳴きながら俺の顔目掛けて一直線に身体の上をトコトコと軽快に歩いてくる。

「くっ、来るなあ ツ！！」

一歩一歩近づいて来るたびにどんどんと大きくなる、つぶらなネコの瞳に悪寒が走る。

ついに白ネコは首元にまで来ると、絶妙のマウンテンポジションからじいっと真下を見つめ、

「んにゃっ」

と鳴いた後、その小さい舌でぺろぺろと俺の顔を舐め始めた。

ぎゃああああああッ！！ やっ、止めるおおおお ツ！！

必死に顔を背けてもネコの奴は俺の顔を舐めるのを止めない。とうとう口までガツツリと舐められた。

おい、ファーストキスがよりによってネコかよ……と、この時まだ夢の中と気付いていない俺は色んな意味で気が遠くなる。

その時、ふと気付いた。

……この感触、全然ネコの舌っぽくねえぞ？ ざらざらしてねえし。

どっちかっていうと人間のある部分の感触に近いような気が……。

・
・
・
・
・
・
・
・

俺の意識は一気にここで覚醒した。

目を開けた時のこの光景を俺は墓場まで忘れないだろう。

俺の顔の上に二人の女の顔があった。説明するまでもなく美月と怜亜だ。熟睡していた俺はこいつらに同時にキスされていたのだ。

上空から何やら激しいシャッター音。

「ニヤニヤと下卑た笑い顔を浮かべたシンが、デジカメを俺らに向けて何度もシャッターを押している。」

「あ。柊兵、起きちゃった。ね、シン、ちゃんと撮れた？」

俺から口を離れた美月が上を振り返って聞いている。っつーか美月はなんでシンを気軽に呼び捨てにしてんだ？

「バッチリっすよ、美月ちゃん！」

片目をつぶり、グツと親指を突き出すシン。後で絶対に殺す。

怜亜も唇を離し、「楠瀬さん、どうもありがとう」と丁寧な礼を言っている。

おいおい、こいつら、いつのまに仲良くなってたんだ？

……本来の俺なら二人の女に同時にキスされている事を知った時点で、動悸が激しくなり呼吸困難でも起こしかねなかったが、自分が理解できる範疇のレベルを飛び越えた状況だったために思考はその活動を緊急停止していた。

その後、ようやく白濁していた思考が活動を再開すると、混乱は逆上へ向かって一直線の経路^{ルート}を突き進み出す。

今の状況を把握した俺の目に怒りの色が表れ始めた事に気付いたシンが素早く釘を刺してきた。

「言っとくけど柊兵、俺らに怒るのは筋違いだからな？俺らは美月ちゃんと怜亜ちゃんに頼まれて、仕方なくやったんだからな。そこんところよろしくっ」

「そうよ、柊ちゃん。悪いのは全部私たち。だから怒るなら私たちが怒ってね」

すぐ側の至近距離で怜亜が両手を合わせて頼み込んでくる。バカ野郎、女をどつけるかっての。

「皆、どうも協力ありがとうね！これでまず今年の目標の一つは

達成よ！」

美月の声高らかな勝利宣言に男共が「おお〜！」と感嘆の声を上げながらパチパチと手を叩く。

目標ってなんだよ、おい！

「ねえ怜亜、ちゃんと同時に半分こずつに出来て良かったよね！」
「ええ！」

だからなんのことなんだっての！

左袖で乱暴に口を拭い芝生から素早く身を起すと、まずは周囲を囲んでいるシン達を、次に両横にいる美月と怜亜を無言で睨み付けた。

しかし美月はへへへっと得意げに胸を逸らし、怜亜は柔和な顔で微笑んでいる。

この銀杏高の女達の中で俺の睨みに全然ビビらないのはたぶんこいつら二人ぐらいだろう。

「あのね柊兵、あたし達決めたんだ。これから柊兵のことは何でも半分こしようって！ ねっ、怜亜？」

「そうよ、柊ちゃん。美月も、私も、柊ちゃんのこと大好きだからなんでも半分こなの。でね、今回は柊ちゃんとの初めてのキスを半分こすることにしたのよ」

……全然意味分かんねえ！

「だからあ、柊兵の唇を真ん中から半分に分けて、左の口角までをあたし、右の口角までを怜亜って決めて、今日のお昼に奪いにきたんだ！ ヒデヤシン達に協力してもらってね！ まあでも二人で同時にキスしたから口の端になんとかぎりぎり触れたくらいだけだね」

……そうかつ、だからシンはさっき急に昏寝をしようなんて言い

出しゃがったのかっ……！

「でもいいじゃない。それでもちゃんとキスできたわ。あ、楠瀬さん、カメラありがとう」

怜亜がシンからデジカメを受け取るうとした所を横からすかさず横から奪い取る。

「あん、柊ちゃん返して」

「おっ、お前ら！ 俺にもうまとわりつくんじゃねえって言っただろッ！？」

「でもあたし達は柊兵のことが好きなんだからしょうがないじゃない！」

「だっだから、おっ俺の都合も考えろ！」

「だって柊兵、彼女いないんでしょ？ ヒデから聞いたよ？」

「だから私たち、柊ちゃんを仲良く半分こしようと思って……」

おい、だからその 半分こ、っていう思考がそもそもおかしいだろ！？

そう言いかけてふとあることを思い出す。

美月と怜亜の父親は同じ製薬会社に勤めている。

だから小学生の頃、美月と怜亜はその製薬会社が契約しているマンションに住んでいた。要は社宅みたいなもんだ。

同じ建物に住み、同じ年で同じ性別。こいつらが親友になるのもまあ当然の成り行きみたいなものだったのだから。

事実、こいつらは友達というよりは姉妹……、いや、同い年だから双子のように育っていた。

こいつらはいつも一緒だった。

俺は小学四年の時に転校してきたこいつらと同じクラスになって、その後の小学校を卒業するまでの三年間、ヒデと四人でそれなりに仲良く遊んでいたような気がする。中でも美月は俺やヒデと同じ道場に通い始めたのでよく一緒にいた。

しかし中学にあがる年の三月に、美月と怜亜の父親に同じ都市への転勤辞令が出て、こいつらはまたも仲良く引っ越していったのだ。転勤先が同じ場所だったので、中学以降もこいつらはずっと仲良しこよしをしてきたらしい。そして今年の九月に親達の転勤期間が終わり、美月と怜亜は半月前に再びこの街に帰ってきて、この銀杏高校に編入してきた、というわけだ。

そっぴや、小学生の時、よくこいつらは何でも半分に分けていたな。

それは美月と怜亜にしてみれば双子のように育った親友として当たり前なのだろう。

……しかし男まで半分に分けようだなんて頭おかしくねえか？

ツインカム・エンジェル！ <3>

「柊ちゃん、お願い、カメラ返して……」

怜亜がうるうるとした瞳ですがるように俺を見ている。

……ヤバい、また調子が狂う……！！

「か、返すが、中の記憶は消す！」

怜亜は本当の女分だけ、尚人よりも激しく調子が狂っちまう。

羞恥写真を消そうと削除キーを探す俺の腕に美月が齧りつく。女のくせにすごい力だ。

「ああっ止めてよ柊兵！ 永遠の乙女の思い出になるあたし達のフーストキスのメモリーショットなんだからあ！」

「知るか！」

なんだ、お前らも初めてだったのか……。実は俺もそんなんだよな。死んでも言わねえけど。

「いいじゃないか、柊兵。黙って渡してやれよ。男ならそんな写真一、二枚撮られたぐらいでうろたえるな」

むずがる赤子をなだめるような口調でヒデが横から口を出してくる。

「さっすがヒデ！ もっと柊兵に言ってやってよ！」
美月がヒデをけしかけている。

両手を胸の前で組み、悲しそうな瞳で俺を見ている怜亜の側に尚人が近づき、

「はい怜亜ちゃん」

とその目の前にスツと携帯電話を差し出した。

「ほら大丈夫、今の本番前の口慣らしなら僕もこれで一枚撮ったかウォーミングアップ

ら。これ、すぐに怜亜ちゃん達のケータイに送るよ」

「えっ、本当ですか？ 嬉しい！」

慌てて横目でディスプレイを覗くと、寝ている俺の頬に両側から幸せそうに口付けをしている美月と怜亜の横顔がどでかく飾られている。これ以上無いぐらいの羞恥写真じゃねえか……。

「おっ、お前らなあ！」

本気で頭に沸騰した血が集まり出した俺に「まあまあ落ち着け終兵くん」と笑みを浮かべたシンが近づいてくる。このだらしのねえシンの顔。この顔は絶対に何か企んでいやがる顔だ。間違いない。

咄嗟に身構えた俺を横目にシンはまた大げさな素振りで大きく両手を広げた。

「さあ美月ちゃん、怜亜ちゃん！ どうぞ俺らにすべてお任せ下さい！ 可愛い女の子二人がその可憐な胸にずっと秘めてきた夢を今ここで華々しく成就させる為、俺ら正義の戦隊がこれからお手伝いをさせていただきます！」

「……正義の戦隊って何だ。それじゃあ俺はこれから成敗される悪役か？」

「じゃあ皆いいなっ！？ レディッ、GOッ！！」

突然シンが俺の両腿の上にガバツと馬乗りになる。そして俺の下半身の動きを封じると続けて叫んだ。

「ヒデ！ 腕ッ！」

「おっ任せろ！」

ヒデの太い腕ががっしりと俺の二の腕を掴み、俺の上半身は再び芝生に押し付けられた。

「うおわっ！？」

「尚人は頭だ！」

「了解っ！」

横から伸びてきた尚人の手が俺の両耳をがっしりと万力のように固定する。

「将矢は柀兵からカメラ取り上げる！」

「イエッサー！！！」

ヒデに腕を押さえつけられているのでカメラはあっさりと奪われた。

感心するぐらいの巧みな連携プレー。さすがつるみだして二年目突入だな。頭に血が昇っているつもりだったが、こいつらの阿吽の呼吸に感心している俺もまだ結構冷静かもしれない。

「うわ〜スゴイ！ 鮮やか〜！！！」

「柀ちゃん、捕まっちゃった！」

俺の側で美月と怜亜が手を取り合ってきやいきやいと喜んでいる。

たちまち俺はさつき見た悪夢の中のように、両手足の自由を奪われた生贄モルモットに逆戻りした。

「は、離せって！ てめえらっ、後で覚えてるよッ！？」

身をよじってそう怒声を上げるが誰も聞いちゃいねえ。

さすがに男三人に全力で押さえつけられれば逃げ出すことも叶わなかった。

「さあさあではどちらのお嬢様からにしましょうか？」

俺の脚の上にいるシンが美月と怜亜に向かって尋ねている。

ここまでできてやっと俺はこれから自分の身にどんな災いが降りかかるうとしてるかをつつすらと理解し始めていた。

ミニ・影浦の占いで出ていた 仲間達の協力で起こる、とってもいいこと とは……！

「美月からでいいわ」

怜亜が微笑みながら順番を譲っている。

ああ、やはりこいつも昔から全然変わってねえな……。こういう時必ず先に一步引くのが怜亜だ。自己犠牲精神が強いんだよな、こいつ。昔から自分一人が貧乏くじを引くと分かっているもためらわずに引きに行く性格だった。

「ん〜そうお？ ファーストキスは一応同時に出来たし、じゃあお言葉に甘えて!!」

美月がよいしょっ、と言いながら俺の腹の上に跨る。

スカートが大きくひらめき、慄いた俺は即座に腹筋に力を入れた。間髪入れずに胃の真上にドスツと勢いよく美月が座り込む。

「ぐおわあっ!」

「うわっ、柊兵のお腹、すごく硬い!」

当たり前だろ、普段から影で鍛えてんだからな。それよりもうちよゝい遠慮して座れよ。ついさっき食った弁当がリバーシしたらどうすんだ。

「へへ〜、まさか今日一日で一気にここまで進めるとは思わなかったよ〜! じゃあ風間美月、参りますッ!」

参ります、ってこれから組み手練習するわけじゃねえんだからよ……。

腹の上から俺を見下ろす美月は太陽のような輝く笑顔で俺に向かって顔をほころばせている。

……どうでもいいがこいつ、胸でけえ……。

下から見ているとそれが一層よく分かった。胸元の赤のリボンが垂れ下がることが出来ずにその上に乗っている。

小学校を卒業する頃はまな板みたいな胸だったくせに、その後の四年間、美月の成長細胞は童話、『アリとキリギリス』の蟻のようにコツコツと額に汗水垂らして懸命に働き、食料の代わりにせっせと大量の脂肪を溜め込んでここまでこいつの胸を見事に膨らませた

らしい。

しかしよくここまで育ったもんだ。少々感動した。

……いや待て、感動している場合じゃねえ！

そのでかいゴム鞆二つを標準装備した美月が俺に向かってぐいと顔を寄せて……。

「やつ、やめるおおおおおおお　　ッッ！！！」

叫ぶだけ結局全て無駄。この状況で哀れな生贄モルモットが縛めから解き放たれる可能性など一切ありはしなかった。

「んーっ」

唇に柔らかい感触が再び当たる。しかもかなり強引に。脳天が痺れる。

美月がますます強く唇を押し付けてきたので、伏せられたその長い睫と黒髪が俺の上頬にかすかに触れた。組み手でヒデから頭部にまともに蹴りを喰らった時より今の方が脳の衝撃が強いのはどういうことだ？

「おい将矢、カメラカメラ！　撮れ撮れ！」

「イエッサー！！！」

シンに促され、目線を合わせるために芝生に腹ばいになった将矢が、俺と美月が唇を合わせている横顔をデジカメで何度も撮影している。

……これは悪い夢だ。悪夢だ。さっきのネコの夢が現実で、こっちが夢であってくれ……！

「はい！ いいよ怜亜！ 次は怜亜の番！！」

約十秒近く俺に唇を押し付けていた美月が俺の腹から下り、怜亜を促す。

頬を赤らめた怜亜は小さく頷き、耳横の髪に手をやると、しゃなり、と俺の側に擦り寄ってきた。

しかし前から思っていたが本当にこいつはネコみたいな動きをする奴だ。

「柊ちゃん……」

怜亜は脚を崩して横座りになると、全身を投げ出すように俺の身体にもたせかけ、そっと覆いかぶさってくる。潤んだ瞳の怜亜の顔がゆっくりと近づき、香水が何かのいい匂いが鼻腔をくすぐりだす……うわっ、やべっ！ 心臓の鼓動が勝手に早まってきたやがったッ！ 俺のこの拍動、くっついていてる怜亜に直に伝わっちゃまってるんじゃないか！？

美月のムードゼロのモーションと違い、怜亜のこれは最早立派な反則技だ。引きつった顔で硬直する俺の頬に優しく両手を添え、怜亜が顔を寄せてくる。いい形をした桜色の唇がどんとと接近してきて……。

ちよっ、ちよっと待て！ 待てっつて怜亜！ せっ、せめて心の準備をさせてくれッ！

しかし容赦無く再び柔らかい感触。

柔らかさの中にも美月と怜亜のそれぞれの唇は感触が違った。

美月の唇は温かくて怜亜のは少しひんやりとしている。決して強くないが、ぴったりと唇を押し付けてくる怜亜のそれは、母犬が子犬をいとおしむ様な保護的な優しさを感じた。……だがどっちにしても心臓が締めつけられるように痛いことには変わらない。キユ

……救……心……！！

「うおおー！ いいね、いいねえ！ 月9のラブシーンみてえだ！」

そんなに連写したら壊れちゃうんじゃないかねえかと心配するぐらい、デジカメラのシャッターを切りまくりながら将矢が興奮した声を上げる。……おい、男三人がかりで体中を拘束されたこんな状態でやるラブシーンなんかあるのかよ……

怜亜はたっぷり十五秒近く俺から離れなかった。

息が苦しくて、マジで甘い拷問を受けているような気分させられる。

やがて怜亜は聖母のような慈愛に満ちた顔で俺から優しく唇を離れた。酸欠で頭がくらくらする。

「満足しましたか？ お嬢様方？」

シンの言葉に美月と怜亜が「うんっ！」「えええ！」と満面の笑顔で答えている。

和やかな雰囲気漂うこの場の中で俺一人が即死状態^{デス}。今にも本気で死にそうだ。

「そりゃあ良かった。じゃあ早速次の用意だ。いいか、皆？」

何ッ、まだ俺に何かする気かよっ！？

焦る俺を尻目にシンが全員を見渡してカウントダウンを始める。

「いくぞおーっ！ 3、 2、 1、GOーッ！！」

次の瞬間、俺は自由の身になった。

シン達が押さえつけていた俺の身体から手を離し、一目散に逃げ

出したのだ。

全員脱兎の如くこの場から走り出している。むろん、マジでブチ切れ五秒前の俺の攻撃から安全な場所に退避するためだ。

それにしてもあいつら逃げ足だけは本当に速いな……。

美月なんかは男共にも負けていない。運動が苦手な怜亜だけはヒデが手を引いて走ってやつている。

「先に教室に帰ってるぜ、柊兵くん！」

「またね、柊兵くん！」

「ありがと、柊ちゃん！」

「へへっ、いい写真撮れたぜ〜！」

「後で見せてくれな、将矢？」

「あっ僕にも！」

口々に好き勝手な台詞をのたまいながら奴らはあっという間にいなくなつた。

一度はふらつきながら上半身を起こしたが、結局バツタリとまた芝生に倒れこむ。

HPはすでにゼロ。マイナスかもしれん。

フォーネンバクト

MPもさっきの強制接吻で綺麗に残らず吸い尽くされた。このま

ま昇天か？

魂の抜け殻、憔悴の軀状態で早秋の高い空を見上げながら俺は複雑な気分になる。

……なんであいつら、俺がいいんだ？

昔小学校時代の同級生だったってだけで、中学時に転校して以来、俺は美月や怜亜と一度も会っていない。あいつらから毎年欠かさず

年賀状は来ていたが、俺は筆不精なせいもあり一度も送り返していない。

それなのに美月と怜亜は俺がこの高校にいることを知っていた。そして十一日前に隣のクラスに転校してきたあいつらは真っ先に俺に会いに来た。

あれは忘れもしない九月三日。

いつも通り教室内で不機嫌な表情で外を眺めていた俺の目の前に「久しぶり！」と突然現れ、放課後に俺を体育館裏に呼び出したあいつらはいきなり告白してきやがったんだ。

「柊兵！ あたし、あんたの事が好き！」

「私も柊ちゃんのが大好きっ」

「だ・か・らっ」

この後、美月と怜亜が唄うように口にしたハモリ音は衝撃、ただその一言に尽きた。

「二人一緒に彼女にしてちょうだいっ！！」

……後日、【モーニング・スクランブル】の公式サイトにアクセスし、『ミニ・影浦の愛の十二宮図』ホロスコープの過去の占いを密かに調べてみた。

不細工天使のミニイラスト付きの九月三日の天秤座の恋愛運は、

【 天変地異が起こるくらいの劇的な出会いが
あなたの頭上に華麗に華咲くことでしょう！
】

だった。

……ミミ・影浦、あんたは

マジで凄いよ。脱帽だ……。

所詮この世は男と女 【前編】

『 ぼおくらあゝのおゝ愛はあゝゝこのお世界いい中でえゝ、
誰にも邪魔あさせえゝやあしなあああいいいいゝゝ！ だか
らあああゝゝ今すぐううキスうおおゝしてええゝゝ！ 』

「よつ将矢ツ！ この大統領ツ！ キスしろキス！！」

「へえゝ将矢つて歌上手いんだね！ ね、怜亜？」

「ええ、こんなな上手に歌う人初めて見たわ」

『 いやいやいやいやゝ、そんなことないツよゝ！ だははゝ！！ 』

シン、美月、怜亜に次々に煽てられ、調子に乗った将矢の天狗声
がマイクを通して何倍にも増幅されて俺の鼓膜にガンガンと響く。
おかげで元々不機嫌な顔が更に暗鬱になる。

ここは银杏高校からほど近い場所にあるカラオケボックスだ。

このさざめく防音密室の中で、俺は相も変わらず仏頂面で腕組み
をし、安っぽい革張りソファに気だるく身を沈めきつていた。

数あるアミューズメントスポットの中でカラオケボックスが俺は
一番嫌いだ。

で、何故その俺が今そこにいるのかというと、

……またこいつらに嵌められたのだ。

笑いたきや、笑え。

一日に二度も同じ面子に一杯食わされた俺を、心の底から嗤笑し
る。

昼に全員で示し合わせてあれだけの謀略を俺にしたシン達は、自
分達の身の安全を危惧したのか、目に怒りの光を残したまま教室に

戻って来た俺に即座に陳謝し始めた。そして、

“ もう自分達は充分に反省している ”
“ 魔が差したんだ ”
“ 今日の放課後に詫びの印に四人で上手いモンを奢る ”
“ 頼む、どうかそれで許してくれ！ ”

とコメツキバツタのようにペコペコと何度も謝ってきたので急に馬鹿らしくなった俺は「分かった」と答え、それを受けたのだ。今思えばおめでたいにも程があるのは認める。

放課後、俺は四人にこのカラオケボックスに連れ込まれた。そついや、「最近はどういう所でも結構美味しいメニューがあるんだ！ たらふく食ってくれ！」と、妙におかしなテンションでシンが熱弁していたな。

扉の一部分がガラスになっているのは室内で良からぬ事をさせないための店側の防止策だとは思うのだが、食い物を適当に頼んだ数十分後、ガラス部分の向こう側に紺のハイソックスを穿いた細い女の足が二人分見えた時、俺はまた自分が畏に陥れられた事を悟る。そしてすぐに扉が勢いよく開き、

「じゃああーんっ！ 遅くなってごめんねえ！」
「お掃除当番が長引いちゃって……………あらっ柊ちゃんどうしたの！？」
「気分でも悪いの！？」

ソファでがっくりと頭を垂れている俺に怜亜が駆け寄ってきた。
……………お前らのせいだろうが。

「柊兵のことだからお腹減りすぎて具合悪くなったんじゃない？」
美月が呑気な口調でそう言い放った後、さも当然のように俺の横

にドサツと座ってきやがった。シン達がニヤニヤとしまりの無い顔で朗笑しているのがムカついてしょうがねえ。

そこへ再び入り口のドアが開き、光合成一切無し暗室で育ったモヤシみたいな貧相な体格の店員が、「お待たせしました」と棒読みの口調で注文した食い物を室内に運び、テーブルの上に次々と並べ出す。

「ほら柎兵、食べ物が来たから元気出さないよ！ あ、皆サラダ取ってくれてないでしょ？ じゃあサラダ追加注文しま〜す！」

「かしこまりました。大根サラダ、グリーンサラダ、シーザーサラダ、トマトサラダ、ミモザサラダがありますが、どれになさいますか？」

無表情で追加オーダーを受けるモヤシ店員。

こいつに恨みは無いが、八つ当たりでその逆三角形の細顎に思い切り掌底を喰らわせたい気分だ。

「う〜ん、どれにしよっかな〜…よし！ シーザーサラダと、トマトサラダと、ミモザサラダッ！」

……おい、そんなに食う気が、美月。

内心でそう思ったことが視線にまで出ちまったようだ。

「ああ〜！ 柎兵つてば今さ、『よくそんなに食うな』って思ったでしょ！？ サラダだから大丈夫だもん！」

オーダーを受けたモヤシ店員は一礼後、幽霊のように出て行き、

美月の言葉を聞いたシンが意外そうな声を出す。

「えっ美月ちゃん、まさかダイエット中なの？」

「うん、ちよつとだけ節制中なんだよね」

「何言つてんのさ。全然太つてないじゃん」

「ううん、ここで気を抜くと一気に来るのよ、あたしの場合」

「もしかして怜亜ちゃんもダイエット中？」

「いえ、私は特に……」

「怜亜がダイエットなんかしたら倒れちゃうわよ！　こんなに細いのに！　ね、柊兵？」

なんで急に俺に振るんだ。

無言でそっぽを向く。本意では無かったにせよ、つい数時間前にそれぞれ唇を合わせた女が両脇にいたのでいたたまれないことこの上ない状態だっというのによ。

今月の新曲配信リストからどの曲にするかを決めかねていた尚人が、リストから視線を外さないままでそんな俺を一笑する。

「ははっ、柊兵、マジで怒ってるっばいね」

やっとこいつらがこの話題を出してきたのでそれまで黙り込んでいた俺はここぞとばかりにすかさず激高し始めた。

「当たり前だっ！！　おい、てめえら！　一体何度俺を騙したら気が済むん」

「ああーっ！！　ヒデ！　それ俺の分の春巻きじゃんっ！！」

「甘いな将矢。この世は弱肉強食。それが自然の理（じつわり）。よって早い者勝ちだ」

「お前に情けは無いのかよ！」

「無いな。特に男には」

「ひでえ！！」

「ねえ美月、このバームクーヘンのプチケーキ、美味しいわ。ちょっと食べてみて」

「じゃダイエット中だけどちよっただけ……。あ！　ホントだ！　なかなかイケるじゃない！　もうちょい生クリームあれば完璧！」

「そうね、フルーツも添えてあればもっといういかもね」

.....またしても誰も聞いてねえし.....。

「さあ、ここいらで我らが柊兵くんも一曲どうだい？」

シンが俺に向けてマイクを差し出したがうつかり熱湯に触れたかのように慌てて手を引つ込める。眉間を射抜くような俺の威嚇視線にビビッたせいだ。するとこのやり取りを見ていた美月がケラケラと笑い出す。

「あゝ柎兵はダメダメ！ いくら言っても絶対歌わないよ！ だつて柎兵つてすつごく音痴なんだもん！ ねっ、怜亜！」

「え？ そそっ、そんなことないわよ？」

……怜亜の奴、今一瞬どもつたな。嘘のつけない奴だ。

「小学生の時の話なだけどさ、音楽の時間とか皆で斉唱したりするじゃない？ 柎兵つて絶対歌わないの！ クラス合唱コンクールの時も結局最後まで歌わなかったし。そうだよねヒデ？」

美月に同意を求められ、将矢から強奪したピリ辛特大春巻きを箸に挟みつつヒデは鷹揚に大きく頷いた。

「ああ。半端じゃ無い音痴だからな柎兵は。俺もこいつとは長い付き合いだが、今まで柎兵が歌を唄ったところを一度しか見たことがない」

それを聞いたシンが急に興味深々の顔つきになった。また俺をおちよくるネタを探すつもりなのだろう。

「ヒデ、そんなにすごいのかよ、柎兵くんの歌声は？」

「ああ、正直突き抜けてるな。その様子を上手く説明するのは難しいが……」

「じゃあ、あたしが的確に教えてあげるーっ！！」

焦った様子の怜亜を左手で制し、トマトサラダを食いきった美月が陽気に叫んだ。

「もっね、本当にスゴイよ！？ とにかくね、メロディの中で合っている音程がほぼゼロなの！ どのフレーズにも一個も無い、と言

「い切ってもいいくらい！」

「でもね美月、そこまで完全に音を外して歌えるのも逆に才能よ！ ねっ、柊ちゃん？」

怜亜、お前のそれはフォローしているつもりなのか。

突如ここで甲高い声の大音量が響く。

マイクのポリウムをONにしたままで将矢が俺を茶化してきたのだ。

「だははっ！ 要は柊兵の唄はジャイアン・ソングってことなんだなあっ！」

……この発言の十五秒後に将矢はこのカラオケボックスの床でまた痙攣するはめになったことは言うまでもない。

そんな将矢を見下ろし、「しっかし本当に要領の悪い奴だなあ」とシンが小さく呟く。そして痙攣しながらもいまだマイクを離さない将矢の手からそれをさっさと取り上げ、懲りもせずに満面の笑みで再び俺に差し出す。

「なるほどね。道理で今までカラオケ行くか、っていう話になる度に柊兵くんが嫌な顔になっていたのかがようやく分かったよ。俺、是非お前の唄を聴いてみたくなっただぜ！ なあ柊兵くん、今ここで一曲歌ってくれよ？」

「断る」

「そんなこと言わないでさっ」

「断るっ！」

俺の怒号がマイクを通して室内を一瞬の内に駆け巡った。

「ちえっ、ノリの悪い奴だなあ。まあ柊兵くんだからしょうがないか」

つまらなそうな声を上げ、シンはマイクをオフにしテーブルの上に置くと制服のジャケットから煙草を取り出した。

シンが選んだこの部屋は喫煙ルームなので当然のように灰皿も置

いてある。臆病さがその全身に滲み出ている小心者のモヤシ店員は、学生服の俺らが喫煙ルームを選んでも何も言わずに無表情でこの部屋に案内したのだ。

青いライターの花が俺の視界に入った瞬間、それまでソファに深々と身を沈めていた俺はグイと身を乗り出し、煙草を啜えたシンの口から黙ってそれをむしり取る。

「何すんだよ、柊兵!？」

一驚したシンがポカンと口を開けている。

「そつだよな、今までお前が煙草を吸っていてもこんな真似をしたことなんて無かったよな。そりゃ驚くだろう。」

「……シン、ここで煙草を吸うな」

「何でだよ？」

「空気が悪くなる」

「何だよ急に。お前だったたまに俺と一緒に吸ってるじゃんか？」

「……いいからここでは吸うな。どうしても吸いたかったら外に出て吸ってこい」

俺はそつぶつ切りに言葉を終わらせると握り潰した煙草をゴミ箱に放り投げ、再び不機嫌な顔でソファに深く腰を落とした。

「そつだよシン、柊兵の言う通り！ 吸いたかったら外に行つて！」

アボガドをフォークに刺したままで美月がソファから立ち上がり、強い口調で俺に同意する。

「あ、そっか、美月ちゃん、煙草の煙ダメなんだ？」

「うっん、あたしじゃない。怜亜なの」

美月は怜亜に目をやる。それは大切な妹を心配する姉のような視線だった。シンの横に座っていたヒデがああ、と急に何かを思い出したように声を上げる。

「そうだ、怜亜は喉が弱かったんだっただな」

「そうだよ。だから怜亜に煙草の煙とか埃っぽい場所はタブーなの。だからシン、外で吸って」

「ごめんなさい、楠瀬さん……」

申し訳なさそうな視線をシンに向け、済まなそうに怜亜が謝っている。

怜亜、お前やっぱりまだ治っていなかったのか……。

「あ、そういう理由ね。ごめん、気が利かなくて!」

慌てたようにシンは煙草を制服の上着ポケットに突っ込んだ。

「でもさっすが柎兵だね!」

美月が嬉々とした声で俺の右肩を容赦ない力でバシバシと叩く。

「怜亜の喉のことまだちゃんと覚えてたんだ? あたしより早くシンの煙草に反応してたもんね!」

「ありがと、柎ちゃん……」

俺を見つめる怜亜の愛慕がたつぷりこめられた視線に気付かない振りをして、横を向くとぶっきらぼうに「別に」と呟く。

ここで面目躍如しようと思ったのか、シンが再びマイクを手に立ち上がった。

「よしっ! じゃあたった今、痺れるようなカッコいいところを見せてくれた柎兵くん、俺からこのメッセーjongを捧げます!

尚人、先に歌ってもいいか?」

「いいよ、シン」

尚人が配信曲リストを差し出す。しかしシンは「あ、もう決まってるからいい」と断ると、タッチパネル式端末でコードを素早く入力する。

数秒後に流れてきた曲は超ド演歌だった。

「皆様、今宵は目一杯楽しんでおられるでしょうか? 本日ここで皆様にある重大な事実をお伝えしたいと思います!」

演歌の前奏部分の間をうまく利用し、シンはわざとらしいほどの高いテンションで即興で考えた前振りを饒舌に語り出す。

「え、今まで女の話をしていても一切加わるうとせず、俺らの中で唯一女性に苦手意識を持っていた柘兵くんではありますが、この見目麗しい二人の天使が遙か彼方の天空から舞い降りてきてくれたおかげで、とうとう柘兵くんにも遅い春の目覚めが到来したようでございます！ ああ素晴らしきかな、 “ 青い春 ” と書いて青春！ ワタクシは柘兵くんのこの性の目覚めを一友人として非常に喜んでおります！ おめでとう、柘兵くん！ 本当におめでとう！ ではいよいよ大人の階段を登り始めようとしている柘兵くんに、友であるワタクシ楠瀬慎吉から謹んでこの曲を贈らせていただきます！ そう曲はもちろん、 『 所詮しよせんこの世は男と女 』 ！！ では、こゆっくりとご堪能下さい！」

そしてシンは朗々とド演歌を歌いだした。……………中の歌詞を俺をからかう単語すべてに置き換えてな。

一体幾つ出ただろう。

ハツリスケベ

チエリーボーイ

バストマニア

ヒップフェチ

ナースフェチ

陰鬱助平、

童貞野郎、

乳星人、

尻偏愛、

白衣執心……………等

一度もつつかえる事なく流暢に歌う完璧なその替え歌に、男共は拍手喝采の嵐、抱腹絶倒の渦。

一方、美月と怜亜は呆然と頬を赤らめて俺とシンの顔を交互に見ている。

……………シン、お前は帰り際に絶対殺す。

……………

所詮この世は男と女 【後編】

「あゝ面白かった！ 特にシンのあの演歌は凄かったよね！ あたし食べていたアボガド嘔き出しちゃったもん！」

「柊ちゃんのお友達って楽しい人ばかりよねっ」

薄暗くなってきた秋の夕暮れ空の下、俺は黙々と早足で歩く。

両腕には必死にしがみつこいつらの重力がしつかりとかかっているが、この重さに微妙に両腕が慣れてきているのが小癢に障っていた。

「でもさっ、柊兵^{チェリーボーイ}って童貞少年だったんだね！！」

……こめかみに青筋が立ったのが分かる。畜生っ、シンの野郎、明日は必ずぶっ飛ばす！

二時間後にいざ解散となるや否や、いつもの危険回避本能を遺憾なく発揮したあの優男は逃げるように一番最初に夕闇の中に消えていきやがった。

ヒデ、尚人、将矢は美月と怜亜に気を使ってさっさと三人で帰っちゃまい、残った俺はこいつらを無事に家に送る役目を押し付けられる羽目となる。

非常にムカつくが、この辺りは歓楽街も近いためあまり治安のいい場所ではない。こいつら二人をここにほっぽり出して一人で帰るほど俺も人でなしでは無いので、やむなくこいつらを家まで送るところにする。

「でも良かったよね、怜亜！ 柊兵が他の女の人とまだエツチ経験無くてさ！」

おい、まだその話題を引きずってるのか、美月！？ こんな場所でそんなデカい声を張り上げてはしたねえことを叫ぶんじゃないやねえ！

しかも怜亜！ お前も頬を赤らめてこくこく頷いてんじゃねえつての！

「ええ本当に良かったわ！ 柊ちゃんが他の女の人のものになってなくてっ」

うああああ！ 確かにこいつらの言ってる事は合っている！
合っているんだがいたたまれない！

「う、うつせえな！ お前ら、シンの言っただでたらめを勝手に鵜呑みにすんなっ！」

……ばっ馬鹿か、俺！ 思わず強がっちゃった！ で、でも仕方ねえだろ、男から見栄と誇りを取ったら一体何が残るって言うんだ！？

しかしこの一世一代の強がりはいいつらにとって効果観面だったようだ。両脇の幼馴染たちは途端に顔を曇らせ、それぞれ俺の腕から手を離す。

「じゃ、柊ちゃんは他の女の人とエッチしたことがあるのね……」
「そっかー……、柊兵はやっぱり経験あるんだー……」

く……っ……！

怜亜の寂しそうな横顔に良心がキリキリと痛む。その物憂げな儂い表情に心臓が急激に激しく高鳴り出した。

美月も同じような顔で細く吐息を吐いている。普段爆弾みたいにうるせえ女が急にしおらしい面を見せてきやがると、それはかなりの威力で男心の鐘をぶち鳴らすことを俺は今初めて知った。

……どうする？ こいつらに今のは嘘だってバラしちまおうか……。

悩む俺の左横で怜亜がフイと顔を上げ、キツパリとした口調で言う。

「でも美月。もう済んじやっている過去の事を気にしてもしょうがないわ。それにそんなことをいつまでも気にしていたら柊ちゃんに嫌われちゃうもの」

「……そうだね！ これから柊兵にそういう女が近づかないようにすればいいだけの話だもんね！」

……おい、立ち直り早いな、お前達……。

「そうよ美月。大事なのはこれからのことだもの。だからこの先もし柊ちゃんに近づく女の人が現れたらその時は……ねっ」

「そうそう！ 前に決めたように二人で完膚なきまでに目一杯叩き潰しちゃうおうねっ!!！」

……しかも恐ろしいな、お前達……。正直少々鳥肌が立っているんだが。

「しゅーちゃん」

「しゅーへい」

目一杯の甘ったるい声で美月と怜亜が再び抱きついてくる。俺は小さくため息をつくと歩くスピードを少しだけ落とした。

道なりに立ち並ぶオレンジ色の外灯にぼつぼつと暖かな光が灯り始めている。

橙色に照らされた美月と怜亜の楽しそうな顔を視界の隅にそれぞれ収め、ついに意を決してボソリと尋ねてみることにした。

「……なあ、お前らがこっちに戻ってきてからずっと聞きたかったんだけどよ……」

「なに？ 柊兵」

「なあに？ 柊ちゃん」

「……俺とお前らは小学校を卒業してから今まで一度も会ってもい

ないし、特に連絡も取ってなかっただろ？ それなのに久々に会ったばかりでなんでいきなり俺のことが好きになるんだよ？」

急に右腕に力強い重力がかかった。

「いきなりじゃないよ、柊兵！」

そして今度は左腕だ。

「そうよ柊ちゃん！ 私たちはずっとずっと柊ちゃんのことを好きだったの。その気持ちが変わらなかっただけ。それだけよ」

「……………」

その答えに俺は黙り込んだ。

……………ということは何か？

こいつらは小学生の頃から俺が好きで、引越して離れても俺のこととがずっと好きのまま、ここに帰って来てもまだ好きだ、ということか。マジかよ……………。

・
・
・
・
・
・
・
・

わずか数度の狂いも無いくらいにきつちりと真正面に顔を向けたが、それでも両横の女二人の頭は嫌でも視界に入ってきてしまう。

美月の長い髪が斜め前から吹いてくる風に流されて右肩にかけているスポーツバッグに何度も当たり、沈みかけた夕日の色を吸った怜亜の短い髪が小さな頭のでっぺんで丸い光の輪を作っていた。

「柊兵、あたしと怜亜はね、小学生の頃、二人とも柊兵のことが好

きだったんだよ。でもお互いの事を気にかけて告白できなかったんだ」

「ここを引越すことになって、新しい街に行った後、美月とよく柊ちゃんの話をしたわ。そして柊ちゃんに対してお互いに遠慮していたこともそこで初めて知ったの」

俺が急に黙り込んだせいなのか、こいつらは更に詳しく自分達の気持ちを持ち出してきた。

「で、あたし達はその時決めたんだ。お父さん達の転勤期間は四年以上で聞いていたから、またこの街に戻って来て、その時になっても柊兵への想いが変わっていなくなったら今度はちゃんと告白しようねって。あ、それとあたし達ね、引越しても時々ヒデとは連絡取ってたんだよ？」

「何いつ!?!」

ヒデの奴、俺にそんなこと一度も言ったこと無かったぞ？

「ヒデちゃんから中学や高校の柊ちゃんの様子を時々聞いていたの。高校に入って今は楠瀬さん達と仲良くしていることも事前に教えてくれていたから、私たち、あの人達ともすぐに打ち解けられたものね」

「あたしなんて初対面でいきなりあの三人を下の名前で呼び出したから、シンとか最初驚いてたよね!」

……なんてこった。しかしヒデの奴、なんで俺に黙ってたんだ？

「柊ちゃん、私たち、銀杏高校に編入してすぐに柊ちゃんに会いに行っただでしょ？ あの時、教室の一番後ろで窓の外を退屈そうに見ていた柊ちゃんの横顔を見て、柊ちゃんへの気持ちが全然変わって

いないことを確信したのよ」

「そう、怜亜の言う通りっ！」

ここで両腕に今までで最高の重力がかかる。さすがに重い。

「……だ、だからってよ、なんでそこで “二人同時に彼女にしてくれ” なんてクレイジーな思考に辿り着けるんだよ？」

「だあって、あたしと怜亜は親友だもん!!」

「今まで何でも半分こにしてきたからっ」

……出たな、半分こ。

俺には恐怖の鍵言葉だ。

「だ、だからよ、どう考えてもおかしいだろそれは。大体な、二股かけて付き合っただとしたって、それが未来永劫続けることができる関係だと思ってるのか？」

理路整然と鋭い所を衝けたな。

そう思ったのだが、すぐにこいつらの思考の方が遙かにぶっ飛んでいることを嫌というほど俺は思い知らされる。

「そう！ その点があたし達もネツクだったのよ！ だから考えた

んだっ、いい解決策を！ ねーっ怜亜！」

「ええ！」

「な、なにをだよ？」

……なんだ？ すげえ、すげえ、嫌な予感がする……。

「あのね！ あたし達のどっちかが将来政治家になってね、この日本に『一夫二婦制』を導入するんだ!!」

「フフツ、そうなら素敵よね。何も問題は無くなるもの」

おいおいおいおい！ 待て待て待て待て！

こいつら、完全に着眼点がずれてるって……！！

「お、お前ら、頭大丈夫か……？」
「少なくとも柊兵よりは頭いいと思うけど？」
「そんなにおかしい？ 柊ちゃん」
「政治家になつて一夫一婦制を一夫二婦制に変えるだと？」
「あ、逆もだよ？ 女の人が二人のダンナさんを持つてもOKバー
ジヨンの『一婦二夫制』もね！」
「そうね、やっぱり男女平等じゃなくつちゃね」

ヤバい、こいつらについていけねえ……！ 頭を抱えようとした
が、両脇にこいつらがぶら下がっているのでそれすらも叶わない。

「へへへ、それならすべて解決する問題でしょ？」
「でもその法令成立はまだ時間がかかるから後回しにして、先に二
人一緒に柊ちゃんの彼女にしてほしいの。私たちの望みは今はその
だけよ。だから私たちにしておいて！ ねっ、柊ちゃんっ」
「そうそう！ おとなしくあたし達にしときなさいって！」

脳内でくわんくわんと梵鐘がわなないているようなエコー
音が断続的に響いている。

脳が震え、思考能力完全に停止。こいつらの頭ん中 完全に沸い
てんじゃねえのか？

……なあミニミ・影浦、あんたなら一体この場でどう言えば上手く
事が収まるか分かるか？

とりあえず明日のおたふく占いは運命のBGMが流れてくれる
ことを、頭上に瞬き出した宵の明星に向けて俺は痛切に願った。

最近の俺は考え込むことが多くなった。悩みがあるとこんなにも気が重くなるものなのか。

とんでもねえ思考回路を持つ、押しかけ女房気取りの幼馴染二名に十一日前から振り回され続け、ここしばらく精神力のチャージメーターは【RED】^{ゼロ}が点灯し続けている。予備のバッテリーなどあるはずも無いのですでに極限状態だ。

今朝のおたふく占いは、昨夜願をかけたあの一番星がいい仕事をしてくれたのか、待ち望んでいた運命のBGMが流れた。これで今日一日の俺の身の安全は保障されたようなもんか。

だがもし今日あいつらがまた俺に特攻をかけてきたら、占いは俺が気付いた九日目にしてとうとう外れることになる。こんなもんを気にしている自分に腹立たしさを感じているので、外れて欲しい気持ちもあった。

今の俺はどっちの運命を望んでいるんだ？

今日の占いが当たるようにか？

それとも外れるようにか？

分かんねえ……。

「柎兵、今日は元気ないね」

尚人が俺の顔を覗き込む。

「疲れてんだろ、色々と」

お前が言うか、シン！？

「……シン、昨日はあの下らない歌で散々俺を馬鹿にしてくれたな。後で校舎裏に来い。今度は逃がさねえぞ」

「おー、怖い怖い」

またしても大袈裟に肩を竦めやがって。“怖い” と言いつつその声の八割は笑い声が含まれていやがる。

「柊兵くんのお仕置きは本気で天国に行っちゃいそうなんで遠慮しておくよ」

「お前に断る権利は無い」

「ふーん……。じゃあいいよ、俺これからますます美月ちゃんと怜亜ちゃんのために粉骨碎身しちゃうぜ？」

ウツと言葉に詰まる。

シンの暗躍がこれ以上激化したら本気で自分の身がどうなるか分からん。

「この間は自然に柊兵くんが眠ってくれるように場を作ったけどさ、今度は強制的におねんねしてもらって、そのままホテルにでも放りこんじゃおうかなあ？ 介抱はもちろんあの天使達にお任せして」

「お、お前の力で俺に勝てると思ってるのかよ！？」

「チツチツ、野蛮な柊兵くんはなんでも力で解決できると思ってるから性質が悪い。強制的、って言っても別に腕力だけじゃないじゃん？ 方法はいくらでもあるさ、例えば飲み物にこっそり眠り薬を入れてそれを柊兵くんに飲ませちゃうとか」

……こいつならマジでやりかねん。

うつとおしい長髪を掻きあげ、目の前で悪魔の微笑みを浮かべるシンを腹立たしげに睨みつける事しか俺に残された選択肢は無かった。

「でもさ、安心しろよ。あの子達も “皆にばかり頼ってられない” って昨日言ってたし、後は自分達で何とかするんじゃないの？ だからこれからは傍観者で行くつもりだぜ、柊兵くんが俺に乱暴しなければさ。……あーあ、しかし羨ましいねえ。俺も真実の愛が欲しいよ」

畜生……、どうやら今回もシンも見逃すしかないようだ。

それよりも今シンが言った、「後は自分達で何とかする」と言ったあいつらの言葉がずっしりと脳内に居座り始めたせいでまた気分が重くなった。

そんな憂鬱な俺の鼓膜に、何の前触れも無くある名前が飛び込んでくる。

「ねえ、今日ミミ・影浦が来るの何時からだったっけ？」

何ッ!?

クラス内のどこかから聞こえてきたその声に俺はガバツと顔を上げた。

教室内をぐるりと見渡すと、入り口付近で四、五人の女共が顔を寄せ合い、何かを見て騒いでいる。

「んつと、三時だって!」

「え〜! じゃあ学校終わってから行ったら間に合わないんじゃない?」

「でもほら、占いは三時から四時半までって書いてあるよ! だからHR終わってからソツコーで走れば間に合うって!」

その後の俺の行動はほぼ無意識に、そして本能的に行われたものだった。

「おい、どこに行くんだ柎兵?」

椅子から立ち上がった俺にシンが声をかけてきたが、返事をせずに一枚のチラシを見て嬌声を上げている女共の側に近寄った。

「は……原田……くん……?」

女共が一樣に俺を見上げて怯えた顔をしている。クラスの女と会

話などほとんどしたことの無い俺が急に無言で近寄って来て、険しい顔で見下ろしたのでビビっているらしい。

「ちよつとそれ見せてくれ」

机の上にあつたチラシを勝手に取り上げた。蛍光ピンクの縁取り文字が目突き刺さる。

『 あの 【 モーニング・スクランブル 】 の星占いで大人の気のミニ・影浦さんが、このエスタ・ビルであなたの恋愛運を占つてくれます！ 』

ミニ・影浦がここに来るのか……。

「は、原田くんも占いに興味があるの……？」

女共の一人がためらいがちに問い掛けてきた。ハッと自分を取り戻す。

「あつ、あるわけねえだろ！」

そつぶつきらぼうに言い捨てると嘩然とする女共の中心にチラシを乱暴に投げ捨て、足音荒く再び席に戻った。

「……なあ今の見たか？ 拳動不審もいとこだぜ？ なんかかなりバ気じゃないか、今日の柎兵くん」

「もしかしたら昨日解散した後、あの娘達に何かされたのかもね」

「なあ尚人、それってどんなことだよ？ 俺、なんだかわくわくしてきた！」

「気持ちは分かるが今は聞けないぞ将矢。間違いなく殺される。長年ダチをやつてる俺が保証する」

会話は丸聞こえだが今は怒鳴る気力も起こらない。俺の後ろでこそそと話し続けているシン達を無視し、どんよりと厚い雲が覆われている空を投げやりに眺める。

そして美月と怜亜はこの日、俺の前に姿を現さなかった。

・
・
・
・
・
・
・
・

……………何をやってるんだろう、俺は。

壁際に置かれたヨーロッパアン調の洒落た白いベンチに深く腰掛け、目の前に広がる光景を見ながらそう自問自答する。

ここはエスタ・ビルの七階だ。

このビルはファッション関連のテナントが主に軒を連ねていて、女が好んでよく来る場所らしい。クラスの女共のやかましい嬌声の中でよく名前が上がっている。

俺が現在いるこの七階はファンシーショップが中心のフロアのようだ。

あちこちの店に大小様々の人形が乱雑に並ぶ中、あのおたふく天使のヌイグルミを見つけてまた胸糞が悪くなった。しかし何度見ても不細工極まりない奴だ。

こうして各店舗ごとにパステル調のふわふわした妙ちくりんなグッズやら飾りやらを無秩序にディスプレイしている光景を眺めていると、色とりどりのドロップやゼリービーンズをこの空間一帯に豪快にぶち撒けているような錯覚すら起きてくる。

そんなパステルワールドの中に真っ黒な異端物が紛れ込んでいた。

数十メートル先にある何やら怪しげな黒いミニチュアテントがそれだ。

両脇のテナントが普段そこに商品を展示しているはずのスペースを強引に撤去させ、無理矢理設営したと思われるそのテントは少々肩身が狭そうにひっそりと佇んでいる。例えるなら、きらびやかなパーティ会場の派手なドレスの女達の中に、喪服の女がポツンと一人混じっているようなものだ。

テントの右前には手製の看板が置かれてある。

たぶんこのビルの関係者が急いで作ったものなのだろう、分厚いダンボール地に赤の極太サインペンで、『 ミミ・影浦さんの愛の星占い会場はここです!』と手書きで書かれてある。

時間が無かったのかどうか知らないが、それにしてももうちょいマシな看板を作ってやれなかったのか。

黒テントをしげしげと眺める。

占いが終わる四時半過ぎに合わせてここに寄ってみたのだが、予想以上にミミ・影浦は人気のようだ。まだテント前には数人の女が列を作り、自分の未来を占ってもらおうと従順に待機している。

現在、このフロアにいる人間のほとんどが若い女だ。おかげで学生服姿でベンチに座っている俺は一際浮いて見える。しかし女達は俺を不審人物扱いにはせず、逆に同情するような目でこちらをチラッと一瞥していく。恐らく占い好きな女に学校帰りに無理矢理拉致され、そいつの占いが終わるまで手持ち無沙汰で待っている、哀れな男に見えているのだろう。

畜生、誰がそんな格好悪い真似をするかよ。

だが不審人物に見られるよりはマシなので、人待ち顔で多少の演

技はしておくことにする。

さらに三十分が経った。

最後の迷える子羊がようやくテントから出てくる。

自分が進むべき羅針盤の針が指し示す方向を教示してもらったらしい。晴れ渡った顔で出てきたそのラストの子羊は、今にもスキップしそうなほどの軽い足取りで下りエスカレーターの方角に消えていった。

その直後、テントの側にヒマそうに突っ立っていた従業員が動き出す。

そいつがすぐ奥の従業員通用口を開けて「終了っ」と小さく叫ぶと、たちまち中からわらわらと大勢の男の従業員が出てきて、テントの解体を始めた。

中から運び出される数脚の椅子、丸テーブル、照明スタンド、何本もの鉄パイプ、そして黒い布。瞬く間に黒テントはそこから姿を消した。

そしてそのテントのあった場所に代わりに現れた一人の女に目が釘付けになる。

……こいつがミニ・影浦か？

予想とはだいぶ違った。

俺のミニ・影浦の予想パターンは二通りあった。

まず、一つ目は妖艶な美女。

年齢は二十五歳前後。ボディスタイルも完璧な、色香で男を垂らしこむのが得意そうな感じの女。

もう一つ考えていたパターンが老婆。

年齢は六十を軽く超えていてあと数年で本物の魔女に等級変化クラスチェンジし
そんな容姿の婆さん。

しかしミニ・影浦と思われる人物はこのどちらでも無かった。か
すりもしていない。

一言でいうとフランス人形と日本人形を足して二で割ったみたい
な女だった。

手も足も異様に小さく、もちろん背も低い。百五十センチあるか
ないかぐらいだろう。中学生ぐらいか？

金髪に近い色の髪全体に幾つも大きな巻き毛を作っているので頭
が大きく見える。だがそれに反比例して顔は小顔なのでますます人
形っぽい。ここまではフランス人形だ。

どこが日本人形なのかという顔の作りだ。

顔は純和風的で切れ長の目で、鼻筋は通っているがどちらかとい
うと低め。

西洋と和風をミックスさせようとしたがどこかちぐはぐ、そんな
印象だった。

しかしこの女の場合はそれがミステリアスでどこか人を惹きつけ
てやまない雰囲気を作り出すのに一役買っている。占いなんて職業
を生業にしているのだからさぞかし都合がいいことだろうな、と頭
の片隅で考えた。

その時だ。

黒のローブを肩からすっぽりとかぶった、多分ミニ・影浦と思わ
れるその女は俺の方を一瞬見た。

目が合った。

逸らせなかった。

しばらく見つめ合った。

向こうが笑った。

何かを呟いた。

読唇術をマスターしているわけでもないのに向こうが何て言ったのかが分かった。

「あなた、背中を押してほしいのね」

この小さくて奇妙な女は確かにそう言った。そう言いやがったんだ。

……………何をしているんだろう、俺は。

ついさっきも同じようなことを言ったような気がする。

場所は変わってここはエスタビルの七階から八階へと続く階段の踊り場だ。屋上扉は施錠されているようだし、この階段は従業員専用なので今のところ周囲には誰もいない。

俺とミミ・影浦らしき女以外は。

「久しぶりだったわ！ あれだけ無遠慮に男の子からジロジロ見られたのって！」

女の声の表現法の一つに “ 鈴を転がすような ” というのがあるが、こいつの声はまさにそれだった。聞いていると心臓の裏側を軽く撫でられているような、妙なこそばゆさを感じる。

年齢はたぶん俺より年下だろう。なのになぜか目上を気取った口調にカチンとくる。

先ほど占いを終えたこの女は七階のフロアで俺に向かって妙なことを呟いた後、側にツツツと近寄って来た。そして強引に手を取り、「ちよつとこつちへ来て」と言う俺の承諾も得ずにこの踊り場まで半ば強引に引っ張ってきたのだ。

こんなチビっ子にこれ以上舐められるわけにはいかない。不機嫌さを露にした声で牽制する。

「あんたさ、なんで俺をこんな所に連れ込んだんだ？」

「連れ込んだ？ 嫌な言い方ね」

そう言いつつもチビ女は楽しそうに笑う。細い首にかけていた大様々なペンダントがその笑い声に合わせてしゃらしゃらと軽快な

音を立てた。

「だってあなた、私に会いに来たんでしょ？」

「だ、誰がだ！」

「嘘をつかないでっ。目を見れば分かるんだからっ」

意志の強そうな切れ長の目が俺を射抜く。その強烈な炯眼で思考を勝手に見透されそうな気がして、わずかだが身を引いちまった。

「本当はもう今日の占いは終わりなんだけど、特別に見てあげるわ。あなたが今日最後のお客様よ」

「いらねえよ！」

「どうして？ あなた悩みがあるんでしょ？」

「無い！」

「じゃあどうしてあのベンチから私の事をずっと見ていたの？」

「そ、それは……」

下から問い掛けてくる涼やかな声に上手く返せる答えが思いつかなかった。

……俺は何をしに、ここに来たんだろう？

「……ふうん、なんだか最後に大物さんが来たようね。ちょっと待っててくれる？」

チビ女は俺の返事を待たず、下の階に下りて行ってしまった。七階の従業員通用口の扉が開いた音がしたかと思うと、またすぐに閉じられた音が鳴る。

やがて、よいしょ、よいしょ、という声が一段下から聞こえてきた。

踊り場の手摺から下を覗いてみると、折り畳んだパイプチェアと商売道具が入っているらしい大きな黒鞆を抱えてチビ女がよろよろとふらつきながら昇ってくる。何やってんだ、あいつ。

やがて俺が上から身を乗り出して自分の様子を見ていることに気付いたチビ女は、階段の途中で足を止めてパイプチェアを差し出した。

「ねっ、これをそこまで持って行って行ってちょうだい！　あなた、レデイにこんな重い物二つも持たせて平気なの？」

「冗談じゃねえ、なんで俺がそんなことをしなきゃなんないんだ。その椅子はあんたが勝手に持ってきたもんじゃねえか。そう思ってそつばを向いた瞬間、

「ほらあーっ！　早くしなさあーっ！！」

「ぐわっ！」

慌てて両耳を押さえた。

場所が場所だけにデカイ声を出すとそれが大きく反響しやがる。

こいつの声があまりにやかましいので仕方なく要求通りに椅子を踊り場にまで運んでやった。すると早速チビ女は屋上に続く階段の方向に向けてパイプチェアを広げる。

「はい、じゃあなたはそこに座ってね！」

「なんで俺がここに座らなくちゃいけないんだよ」

「だって立って話してたら話しづらいでしょ？　あなたと私はこんなに背が違うんだから。だからこうやってずっと上を見て話していると首が疲れるの。分かる？　あなたも男の子ならもう少し女性に気を使うべきね」

「……………なあ、俺に何の用なんだ？」

「え？　あなたが私に用があるんでしょ？　占って欲しいんでしょ？」

「だからさつきも言ったろ？　あんたに占って欲しいことなんて無……………」

「ああ、もういいわっ！　まずはとにかく座りなさあああーっ！　首が疲れるのおおおーっ！」

「うお!？」

またしてもこの空間に鼓膜直撃の破壊音がガンガンと響き、俺は顔をしかめた。

次の雄叫び口撃に備えてまたこいつが小さな口を目一杯開けかけたので、忌々しいが渋々パイプチェアに腰を落とす。

「そうそう、それでいいの!」

座った俺を見届け、チビ女は屋上に続く三段目の階段に座る。しかしまだ俺との視線がいい位置に來なかつたのか、慌ててもう一段上に上がった。少し上から俺を見下ろす位置に座り、やっと満足そうな顔を見せる。

「さあ、まずあなたの名前は？」

「だから、占って欲しくないって言ってるだろ」

「……………」

いつまでも頑なに占いを拒み続ける俺に、チビ女は少し気難しそうな顔になってとうとう黙り込んだ。明らかに気分を害しているその顔を見て、自分あまりにも冷たい態度を取りすぎていることに気付き、少しだけ後悔の念が起こる。

「……………あんだ、ミミ・影浦？」

勝手に決め付けていたが、そういえばこの小さな女がミミ・影浦かどうか確かめて無いことに気付く。こんなにちびっこいし、もしかしたら助手とか弟子の可能性もある。

すると階段に座っていた女は口を尖らせたままで頷いた。やはりこいつがミミ・影浦で間違いないようだ。予想と全然違ったな。

「俺は原田柊兵。……言っておくが占って欲しいわけじゃないぞ?ただ、こっただけ名を言わないのも礼に失すると思ったから名乗っただけのことだからな」

「ふうーん。はらだ、しゅーへい君かあ……………」

君付けで呼ばれてムカついたがグツと堪える。さん付けで呼べよ。

「ねえどうして占って欲しくないの？ 私の占い、インチキだと思ってる？」

一段上の場所からミミが俺の方にグイ、と身をかがめてくる。お互いの鼻の頭が今にもぶつかりそうになったので慌てて後ろにのけぞった。

「あら、もしかして照れちゃってるの？ キミ、今時の男の子にしては珍しくシャイなのねっ」

ミミはクスリと笑うとそのちっこい手で俺の鼻をツン、とつついた。

途端に心臓をガツンと一発殴られたかのような衝撃。

……何っ！？ 鼓動が早まってきたらど！？ たっ、確かに女とはいえ、なんでこんなチビっ子に……。

動揺を必死に押し隠す。

と、とりあえずこいつに何か言わねえと……。でも何を言えはいんだ？

“ 占いはまったく信じてねえけどあんたの星占いはなぜか恐ろしくくらいによく当たって、正直かなりビビッている所なんだ ”

……とでも言えいいのか？

そんなみつともねえ事、口が裂けても言うわけにはいかない。考えあぐねている内にミミがまた口を開く。

「だってあなた、私が占った女の子達の付き添いで来ていた訳でもなさそうだし、どうしてあのベンチから私の事を熱い眼差しで見ているの？ ……あ、そっか！もしかして私のファン？」

「違う！」

どうでもいいが論理が飛躍する女だ。
「それもそうよね……。私、メディアにまだちゃんと顔を出したことはないし……」

訪れる沈黙。

何か言わないと帰るにも帰れなさそうな雰囲気に、仕方なく話題を振る。

「……あのさ、『モーニング・スクランブル』のあんたの星占いって、的中率が高いのか？」

「エ？」

切れ長の目を瞬き、ミミは唐突に不機嫌な顔を止めた。

「そうね、なんて説明すればいいかしら……。あの占いは万人向けの占い、プレタポルテなの」

「な、何？」

ヤバイ、こいつの言っている意味がいきなり分からん。

だがそれは俺の反応を見たミミにも伝わったようだ。ミミは少し考える素振りを見せた後、俺が理解し易いよう、優しく噛み砕くように詳しく説明を始める。

「つまりね、あれは多くの人に当てはまるように作られた占いな。ただの吉凶判断で、服で言えば高級な既製服。だからその日、その日であつらえた既製服はたくさんの人が身に着けることができるけど、既製服故に日によつてはどうしてもそれが身に着けられない人もいるわ。だから占いが当たる日もあれば当たらない日もあるでしょ？ でももちろん私があつらえている服が毎日のようにとてもよく似合う人も中にはいるのでしょけどね」

ミミは一段上の場所から笑った。

切れ長の目のせいで冷たい印象を与える顔が、一瞬和らいで見える。

「でもね、既製服だけじゃなくて特別にあつらえた高級注文服もあるのよ？ いわゆるオートクチュールね。それが個人的パーソナル十二宮図ホロスコープ。これはその人の運勢だけを占う、独創的な占いよ」

「オリジナル？」

「そう。ねえ柘兵君、この世の中には何十億っていう人々が存在しているでしょ？」

「ああ」

「でもそれだけの数の人間がこの地球上に存在していたとしても、柘兵くんも私も、その何十億分の一の中でちゃんと独立した一個の生命体だわ。だから柘兵くんの運命も、私の運命も、それぞれ違ったものでなくてはならないの」

優しく教えてもらっているのに早速混乱してきた。

……要は 『 モーニング・スクランブル 』 のおたふく占いは万人向けの占いだから信憑性はイマイチだと言うことが言いたいらしい。少々乱暴な解釈かもしれないが内容は概ね合っているはずだ。

「だからね、柘兵くん個人のもつと詳しい未来を占うには出生天宮ト図を作成しなくちゃいけないの。これを作るには柘兵くんの生年月日、出生時刻、出生地のデータが必要なのよ。柘兵くん、今それが分かる？」

「だっ、だから、いって！ 占ってくれなくても！」

「あなたの悩みは何？」

「悩みも無い！」

「嘘っ！」

ミミはまた先ほどと同じ炯眼をまた容赦なく俺に浴びせる。

「最初にあなたの顔を見た時、すぐに思ったわ。ああ、この人何か悩みがある。それを私に取り払って欲しがってるって。あの朝の占

いを気にしているってことはもしかして恋愛絡みの悩み？」

「あのなあ……」

「いいから最後まで言わせてっ！」

「ミミは鋭く言い放った。こんなちびっこい女なのになぜか言い返せない。」

“ 歯向かう敵の気力を一瞬で無効化しちまう強者のオーラ ”
“ というものがあるのだとすれば、こいつは間違いなくそれを持っている。”

「柘兵くんが占って欲しくない、って言うならもう無理には言わない。その代わり教えてよ。じゃあ占っても欲しくないし、私に興味があるわけでもないのに、どうしてあなたはあそこにいたの？」

「そ、それは……」

どもり、黙り込んだ俺をミミも同じく黙って見つめる。

またしばらく続く沈黙。

……じゃあねえな……。

根負けした俺は意を決して本音をぶちまけることにした。

「……あ、あのさ、気を悪くしないでほしいんだけどよ」「うん」

「俺から見るとさ、占いなんてやつはどうにでも解釈できるようなあやふやで不確かな言葉で適当なことを言っただけで、ただ相手を煙に巻いているようにしか見えないんだよ。占いなんて胡散臭いもんの代名詞だと思っただけ」

「ミミは不思議そうな顔でおとなしく聞いている。」

「だけど、あのあなたの星占いがさ、毎日すげえ当たり続けてるんだよ。今日で九日目……、いや途中で土日挟んでいるから正確には七日間、ピタリと当たってたんだよ。で、たまたまあんたが今日このビルに来るって知って、なんだその、ちょっとあんたがどんな占い師か見てやるうかって野次馬根性が出たんだと思う」

的中し続けるこいつの占いにビビッていることはもちろん伏せておく。当然のプライドだ。

ミミは納得したようなしてないような微妙な顔で膝の上で頼杖をつき、しばらく俺の顔を穴の開くほどじっと見つめていた。そしてようやくおもむろに口を開いたかと思うと、

「あなた、可愛いわねっ！ 私のタイプかもっ！」

とまた鼻をチョンと軽く突つかれた。

な、なんだとっ！？

一瞬絶句した後、本気で頭に血が昇り出す。

年下のくせに男に向かって “可愛い” だーあ！？

ちつくしよう、いくら占い師だからってもう許せねえっ！

ミミに向かって一発怒鳴りつけてやろうとした時、この摩訶不思議な空気を持つ女は転がる鈴の声で一言、俺に向かってこう言った。

「ねえ柊兵くん、私と付き合ってみる？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976x/>

私たちにしときなさい！

2011年10月29日02時18分発行